

農村交流体験型施設たくみの里を事例とした魅力評価

Case study: an evaluation on the attractiveness of Takumi no Sato

塚田 伸也* 湯沢 昭** 森田 哲夫*** 西尾 敏和****

Shinya TSUKADA Akira YUZAWA Tetsuo MORITA Toshikazu NISHIO

Abstract: Green tourism, which incorporates the culture and lifestyle of agricultural, fishing, and mountainous tourist areas, has recently become popular in Japan. The study performed a questionnaire survey at Takumi no Sato (a complex of recreational facilities) in Gunma Prefecture, where visitors can experience rural-urban exchange, to quantitatively evaluate its attractiveness from visitors' perspectives. The results obtained in this study are summarized as follows: (1) many new visitors came from the Metropolitan area and stayed at Takumi no Sato to experience the creation of Japanese handcrafts and foods; (2) many repeat visitors were same-day visitors there for shopping; (3) the factor analysis extracted four major factors for attractiveness as evaluated by visitors: "experience of rural-urban exchange," "facility preparation," "comfortableness," and "specialty"; (4) the overall satisfaction of new visitors tended to be affected by "comfortableness," such as to the natural environment or landscape, and "facility preparation," including cleanliness; and (5) the overall satisfaction of repeat visitors tended to be affected by "experience of rural-urban exchange," such as conversation and exchange with the staff, and the "specialty" of local products. To sustain green tourism, it is thus important to continuously increase visitor satisfaction in experiencing rural-urban exchange while also considering their attributes, the purpose of their activities, and the results of their evaluations.

Keywords: *Takuminosato, green tourism, user, evaluation on the attractiveness, covariance structure analysis*

キーワード: 景観, たくみの里, グリーンツーリズム, 利用者, 魅力評価, 共分散構造分析

1. はじめに

観光立国を目指して「観光立国推進基本計画」が閣議決定され、2008年に「観光庁」が発足した。ツーリズムは人々の癒しやゆとりを求めるツールとしてだけでなく地域活性化のアプローチとしても注目される。ツーリズムが期待される一方で、有名観光地としてマス・ツーリズムを展開する地域が旅行者を集めるものの、財政力に乏しく集客効果の高い観光資源をもたない地方都市や農山漁村地域では観光客の獲得に難航している。しかし、地域においてツーリズムは第六次産業として様々な経済波及効果があり、注目されてきたのがGreen Tourism(以下GTと略記)である。

GTは農山漁村地域の文化や普段の生活が観光資源となり、地域でのツーリズムの手段として有効と考えられている。ドイツでは観光の一つの形態として確立されつつあり、鈴江¹⁾はヨーロッパにおけるGT発展を第二次世界大戦後の農業の過剰生産からくる環境負荷の増大、環境汚染問題の深刻化に起因するとしている。

わが国のGTはドイツを参考に導入され、後に「農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動²⁾と定義される。緑豊かな農山漁村でゆったりと余暇を過ごし、農林漁業等の交流や体験を通じ、地域の自然や伝統文化、人々との交流を楽しむ旅行スタイルである。1993年には、農山漁村余暇法が制定され、農林漁業体験民泊の登録が制度化した。また、地域農業基盤確立農業構造改善事業などの整備により更なる発展が期待されており、GTが旅行の一形態として認識されつつある。

2. 既往研究と目的及び方法

GTを対象とした研究は、社会学、観光学、農学の分野といった広範において、動向³⁾、経営者⁵⁾、都市住民の意識調査⁷⁾を着眼点とした研究が蓄積されてきた。特に、農村計画の分野からは統計的アプローチを用いることにより、利用動向や実態を測定する研究がなされてきた。マス・ツーリズム分野では、室谷⁹⁾が魅力度の評価をしている。利用満足度に関する定量的な評価を扱

った研究として、北垣ら¹⁰⁾は低炭素型の都市公園の計画を事例に評価しており、小松ら¹¹⁾は登別市ネイチャーセンターを対象に自然体験施設の経年変化における利用満足度の構造について共分散構造分析を適用することによって検討している。また、小松らの研究課題として、「他の体験施設においても利用満足度調査を引き続き実施し、利用者評価構造に基づく施設マネジメントの一般論構築に向けた研究を続けるべき」¹¹⁾が挙げられている。

自然体験やGTの施設を扱った類似研究として、木曾三川公園の自然体験施設を対象に総合満足度とリピート意向との関係に着目した岩谷らの研究¹²⁾、仁淀川町のGTのマーケティングに着目した中山の研究¹³⁾がある。

以上を踏まえ、本研究では、利用満足度の観点から、事例研究の1つとして、農村交流体験施設であるたくみの里の魅力を定量的に評価する。そして、先行研究と本研究の結果を比較することにより、新たな知見や特異性を把握することを目的とする。

たくみの里を事例とした理由は、第9回(2012年)オーライ!ニッポン大賞の内閣総理大臣賞(グランプリ)を受賞した全国的GTの事例を代表するものであること、既往研究¹⁴⁾¹⁵⁾において各々の施設内容が評価されてきたものの、定量的に利用満足度を構造化し、評価した研究が公表されていないことである。

分析は、たくみの里への利用満足度に関するアンケート調査を行い、結果に共分散構造分析を適用して構造的に検討する。おわりに、たくみの里の事例研究を通じ、農村交流体験GTの活性化に向けた方向を検討する。

3. たくみの里の概要

(1) たくみの里の歴史と概要

たくみの里は、群馬県利根郡みなかみ町新治地区に位置する。

三国山脈を貫流し利根川に注ぐ赤谷川が地区の原風景をつくり、旧来より猿ヶ京温泉を中心とした温泉観光地が栄えた。温泉南方の養蚕の農村である須川平は、養蚕の衰退に伴って新たな産業の

*前橋市建設部 **前橋工科大学 ***東北工業大学 ****群馬県立高崎工業高等学校

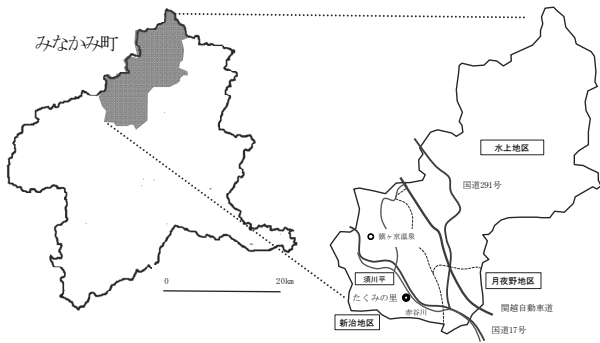


図-1 たくみの里の位置図¹⁶⁾

台頭が求められた。この状況を鑑み、1978年から行われたのが野仏巡りである。野仏巡りは須川平ら各所の野仏や神社仏閣を回るスタンプラリーである。この試みにより徐々に観光客の来訪がみられるようになった(図-1)。

1984年に自治省により提案された地域活性化事業により、「伝統手工芸の伝承・歴史文化の伝承・食文化の伝承・高齢者の生きがい」を目的に、たくみの里事業がはじまった。事業により、地域内に様々な伝統手工芸の体験施設が建設され、道路、駐車場、公衆トイレ、休憩所が整備された。たくみの里の発展にとまない、1993年に(財)新治村農村公園公社を設立し、たくみの里を運営している。1990年に農村公園構想が策定され、1994年には景観形成地区が策定された。1987年に87,963人であった来客数は、2003年に約5倍の470,915人の来客数に増加している¹⁷⁾。たくみの里の最も特徴的であるといえる点は1箇所に施設を集積させた拠点型ではなく、各所に施設を衛星型に点在させたところである。2005年に「道の駅」に登録されており、2014年現在において30箇所の体験施設と25箇所の観光農園が地域内の各所に点在する。「豊楽館」と呼ばれる体験施設を兼ねた総合案内所が各体験施設の情報を発信する中心施設となっており、大型バスや自家用車で訪れる訪問者は、駐車場や休憩所、お土産処を兼ね備えた「豊楽館」に寄り、各所に徒歩やレンタサイクルで周遊する¹²⁾¹³⁾。

(2) アンケート調査と回答者の属性

たくみの里の利用実態を把握するため、たくみの里の利用者を対象として表-1のとおりアンケート調査を行った。アンケート調査は、800部を直接配布し、216部を郵送回収した(回収率は27.0%、有効回答数207部)。

図-2は、はじめての訪問者とたくみの里へ訪問した回数が2回目以上のリピーターに区分し住所についてまとめたものである。

図より、はじめての来訪者は、東京都(20.4%)が最も多く、次いで隣県の埼玉県(17.5%)、新潟県(13.6%)であり、この三都県で全

表-1 アンケート調査

調査対象者	「たくみの里」利用者
調査日	配布期間：2012年10月6日～2012年10月7日 回収期限：2012年10月20日
調査方法	直接配布、郵送回収
回収数/配布数	216/800(回収率27.0%) 有効回答数207
調査内容	1.回答者の属性 ①住所、②性別、③形態 2.たくみの里の来場有無、来場回数(記述) 3.たくみの里の来場目的(1つ選択) 4.たくみの里の滞在時間(8段階選択) 5.たくみの里の体験・行動(複数選択) 6.たくみの里の利用満足度(5段階選択) 7.自由意見
調査主体	前橋工科大学地域・交通計画研究室

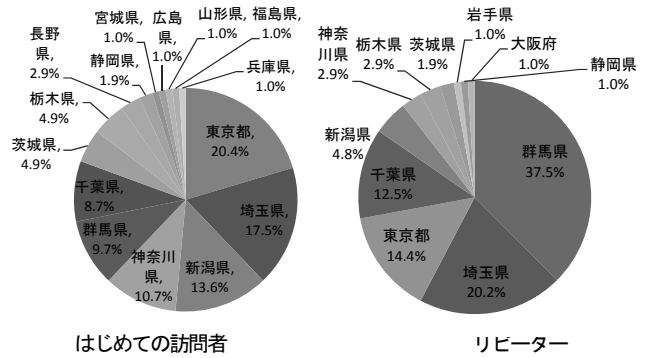


図-2 回答者の住所

表-2 回答者の属性

属性	全 体	はじめて	リピーター	
性別	男性	88(42.5%)	42(40.8%)	46(44.2%)
	女性	119(57.5%)	61(59.2%)	58(55.8%)
形態	日帰り	81(39.1%)	35(34.0%)	68(65.4%)
	宿泊	126(60.9%)	68(66.0%)	58(34.6%)
目的	休息	40(19.3%)	23(22.3%)	17(16.3%)
	買物	60(29.0%)	24(23.3%)	36(34.6%)
	飲食	17(8.2%)	6(5.8%)	11(10.6%)
	情報	8(3.9%)	5(4.9%)	3(2.9%)
	体験	54(26.1%)	28(27.2%)	26(25.0%)
	その他	28(13.5%)	17(16.5%)	11(10.6%)

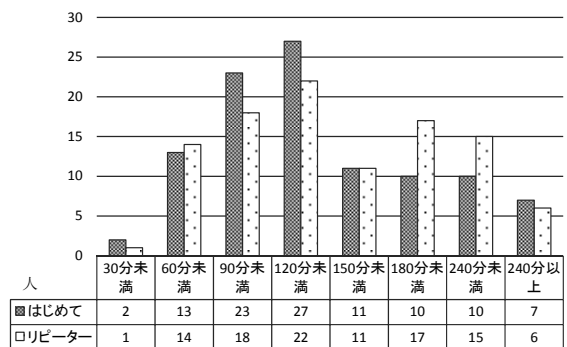


図-3 滞在時間の分布状況

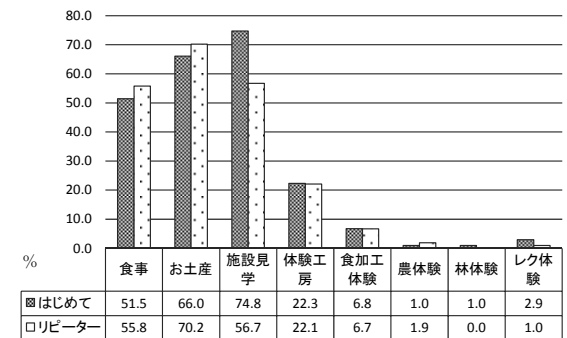


図-4 たくみの里での体験・行動

体の51.5%を占めた。これと比較して、リピーターは、自県の群馬県(37.5%)の来場者が最も多く、次いで埼玉県(20.2%)、東京都(14.4%)であり、この三都県で全体の72.1%を占めた。

表-2は、アンケート回答者について、全体、はじめての訪問者、リピーターに分類して、性別、形態、目的の属性で集計したものである。全体の性別では、女性が男性と比較して占める割合が大きく、はじめての訪問者とリピーターで分類した性別も女性が占

表-3 旅行とお土産の支出額

項目	全体	初回	リピーター
全体の支出	37,483円	46,968円	28,090円
たくみの里お土産	4,623円	4,790円	4,458円

表-4 たくみの里の評価項目

A1	色々な体験	A11	歩行時の安全
A2	体験施設の多さ	A12	施設内の清潔感
A3	会話や一緒にの体験	A13	駐車場の混雑度
A4	スタッフとの交流	A14	アクセス性
A5	スタッフの親切さ	A15	自然環境
A6	名所・旧跡	A16	景観
A7	賑わい	A17	歴史や文化
A8	トイレの整備状況	A18	お土産の種類
A9	休憩所の設置状況	A19	地域の特産物
A10	全体の清潔感	A20	観光資源

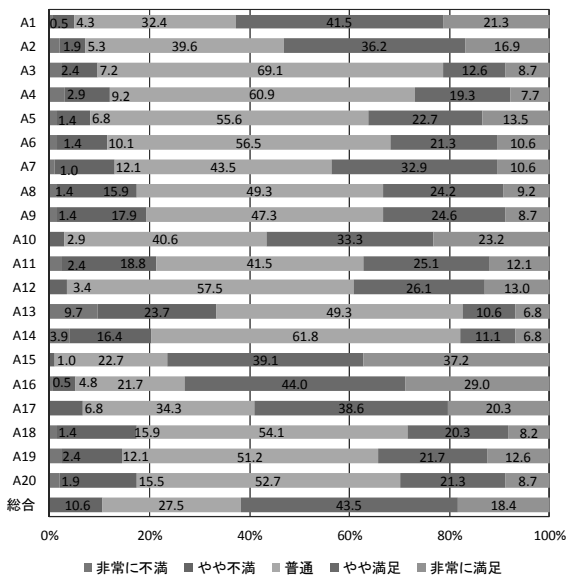


図-5 たくみの里の魅力評価の結果

める割合が大きい結果であった。次に形態や目的において、はじめての訪問者とリピーターで大きく比率が異なる項目に着目する。

形態において、はじめての訪問者は、リピーターと比べて「宿泊(66.0%)」の割合が大きく、リピーターは、はじめての訪問者と比べて「日帰り(65.4%)」の占める割合が大きい値であった。

図-2の結果も踏まえ、はじめての訪問者は首都圏から来た宿泊タイプが多く、リピーターは自県から来た日帰りタイプが多い傾向を把握した。また訪問目的は、はじめての訪問者が大きい割合順に「体験(27.2%)」、「買物(23.3%)」、「休息(22.3%)」であるのに対し、リピーターが「買物(34.6%)」、「体験(25.0%)」、「休息(16.3%)」であった。中でもリピーターは、はじめての訪問者と比べ、「買物(34.6%)」を訪問目的とした割合が大きい結果であった。

(3) たくみの里の利用実態

図-3は、はじめての訪問者とリピーターの滞在時間の分布状況を示したものである。双方ともに「90分以上120分未満」の滞在時間が最も多くを占めた。はじめての訪問者とリピーターを比較した場合、90分以上120分未満を境に、90分未満にリピーターよりもはじめての訪問者の滞在時間が多く分布し、120分以上にはじめての訪問者よりもリピーターの滞在時間が多く分布している傾向が分かる。図-4は、たくみの里での体験・行動について複数選択してもらった結果をまとめたものである。はじめての訪問者が多かった体験・行動は、「施設見学(74.8%)」、「お土産(66.0%)」、「食事(51.5%)」であった。これと比較してリピーターが多かった行動は、「お土産(70.2%)」、「施設見学(56.7%)」、「食

表-5 因子分析の結果 (バリマックス回転後)

番号	交流体験	施設整備	快適性	特産性
A1	0.758	0.139	0.293	0.132
A2	0.727	0.073	0.172	0.239
A3	0.598	0.284	0.176	0.064
A4	0.504	0.362	0.203	0.135
A5	0.481	0.453	0.188	0.205
A6	0.387	0.332	0.349	0.182
A7	0.353	0.217	0.285	0.157
A8	0.115	0.703	-0.026	0.206
A9	0.271	0.532	0.193	0.228
A10	0.133	0.530	0.516	0.076
A11	0.217	0.475	0.083	0.111
A12	0.284	0.470	0.333	0.217
A13	0.018	0.464	0.124	-0.010
A14	0.243	0.365	0.089	0.113
A15	0.158	0.240	0.779	0.099
A16	0.336	0.056	0.772	0.096
A17	0.289	0.101	0.654	0.239
A18	0.198	0.179	0.117	0.917
A19	0.222	0.245	0.213	0.713
A20	0.467	0.202	0.255	0.428
固有値	3.040	2.655	2.625	1.977
寄与率	15.20%	13.28%	13.12%	9.89%
累積寄与率	15.20%	28.48%	41.60%	51.49%

事(55.8%)」であった。果実・野菜収穫などの「農体験」、しいたけのコマ打ち・間伐体験などの「林体験」、バードウォッチングなどのレクリエーション体験である「レク体験」といった実体験は、はじめての訪問者とリピーターともに行動として少なかった。

表-3は、今回の旅行全体の支出額とたくみの里でのお土産代金の支出額について回答してもらった金額を回答者数で除した平均支出額である。全体において今回の旅行で支出した総額の平均は37,433円であった。うちたくみの里のお土産代金として支出した金額の平均費用は4,623円であり、総額に占める割合は12.4%であった。旅行費用の総額は、はじめての訪問者がリピーターより18,878円支出が多かった。理由として、宿泊型のはじめての訪問者の交通費や宿泊費が、日帰り型のリピーターよりも支出が多いことが考えられた。また、はじめての訪問者とリピーターにおいて、行動とお土産の支出した費用を着目すると、「お土産」の購入という行動は、はじめての訪問者よりリピーターの方が微増しており、支出額もほぼ同額となった。このことから、リピーターを維持する上で、お土産の種類や地域の特産物を充実していく経営が重要であると考えられた。

4. たくみの里の魅力評価

小松らの能登市の自然体験施設の調査¹⁰⁾では、利用満足度について26個の評価項目を設定し、5段階で評価を行っている。また、各々項目の評価結果に因子分析を適用することで、前提条件、企画・運営体制、自然体験基盤、快適性の4つの潜在変数を仮定したモデルを構築し、共分散構造分析を用いた総合満足度のモデルを仮定している。本研究では、小松らの研究を参考としながら、たくみの里を評価するため、表4の20個の項目を設定した。項目については、5段階(1:非常に不満,2:やや不満,3:普通,4:やや満足,5:非常に満足)で評価した結果を図5に示した。

利用満足が高い項目(「非常に満足」と「やや満足」の割合)は、「A15:自然環境(76.3%)」、「A16:景観(73.0%)」、「A1:色々な体験(62.8%)」であった。これに対して、利用満足度が低い項目(「非常に不満」と「やや不満」の割合)は、「A13:駐車場の混雑度(33.4%)」、「A11:歩行時の安全(21.2%)」、「A14:アクセス性(20.3%)」であった。「たくみの里」の総合満足度は、「非常に満足」と「やや満足」と評価された割合が61.9%であった。この結果か

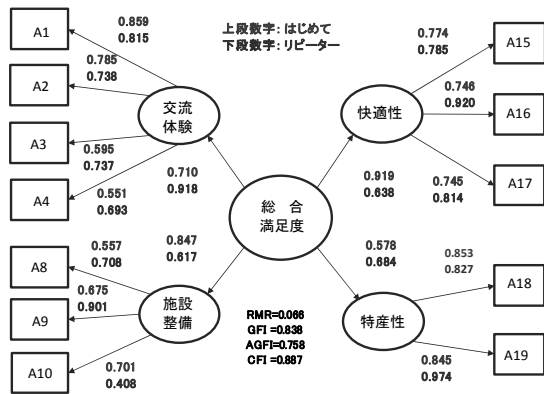


図-6 たくみの里の魅力評価モデル

ら、「たくみの里」は自然、景観面から高い満足度が得られていた。次にA1からA20までの項目の評価結果について因子分析を行い、4つの代表する因子を抽出した(表5)。既往研究¹⁰⁾を参考に、第1因子は、「A1:色々な体験(0.758)」、「A2:体験施設の多さ(0.727)」、「A3:会話や一緒にの体験(0.598)」、「A4:スタッフとの交流(0.504)」など、「たくみの里」の企画や運営に関する項目に関する値が高いことから、「交流体験(寄与率:15.20%)」と意味付けをした。同様に、第2因子を「施設整備(寄与率:13.28%)」、第3因子を「快適性(寄与率:13.12%)」、第4因子を「特産性(寄与率:9.89%)」と意味付けを行った。

分析結果を踏まえ、「たくみの里」の魅力評価モデルを図-6のとおり仮定した。ウェイトの設定には中山¹³⁾らが用いたようなAHP手法や重回帰分析などが考えられたが、今回のモデル作成にあたっては、評価項目間に相関関係から多重共線性の問題が発生することも考えられ、ウェイトの設定に共分散構造分析を用いた二次因子モデルを採用した。この二次因子モデルに際しては(観測変数)からなる複数の因子(潜在変数)を配置し(中項目)、得られた複数の因子からなる総合満足度によるモデルとした。

4個の潜在変数に配置した観測変数は、因子分析で重相関係数が各因子の0.5以上であった12項目を該当の因子の下に配置した。このモデルをAmos20で分析した結果、モデルの適合度指標であるRMRの値は0.066、AGFIの値は0.758であった。なお、図-6中の「→」に記載されている数字(上段:初回,下段:リピーター)は標準化されたパス係数であり、全て1%有意水準を満足した。

はじめての来訪者の総合満足度について、潜在因子との関係を見ると、「総合満足度」に「快適性(0.919)及び「施設整備(0.847)」が4つの潜在因子の中で最も大きい値となった。潜在因子と観測変数との関係では、それぞれのパス係数の値から、「快適性」に「A15:自然環境(0.774)」、「施設整備」に「A10:全体の清潔感(0.761)」がリピーターのパス係数と比べて大きい値となった。

これと比べて、リピーターの総合満足度について、潜在因子との関係を見ると、「総合満足度」に「交流体験(0.918)」と「特産性(0.974)」が4つの潜在因子の中で最も大きい値となった。潜在因子と観測変数の関係では、それぞれのパス係数の関係から、「交流体験」に「A3:会話や一緒にの体験(0.737)」と「A4:スタッフとの交流(0.693)」、「特産性」に「A19:地域の特産物(0.974)」がはじめての訪問者のパス係数と比べて大きい値となった。

5. まとめ

本研究は、農村交流体験型施設たくみの里をGTの代表的事例として、アンケート調査を行い、魅力を定量的に評価したものである。研究の結果、以下のとおり新たな知見や特異性を把握した。施設の内容や立地が異なるものの、岩谷ら¹²⁾中山ら¹³⁾のリピーター

ターに着目した既往研究では、はじめての訪問者とリピーターの住所の相違について言及していない。本研究の結果では、はじめての訪問者は、首都圏から体験を目的とする宿泊タイプの訪問者が多く、リピーターは、買物を目的とする日帰りタイプの訪問者が多いという傾向を把握した。

また、中山ら¹³⁾の仁淀川町を対象としたGTに関する既往研究において、はじめての訪問者とリピーターのGTの評価は、双方とも「景色・景観」、「自然とのふれあい」、「伝統文化」の順に重み付けし、大きな相違がないとしている。しかし、本研究の結果においては、はじめての来訪者の総合満足度が、自然環境や景観などの「快適性」や全体の清潔感など「施設整備」に強く影響される傾向に対して、リピーターの総合満足度が、会話やスタッフとの交流といった「交流体験」や地域の特産物といった「特産性」に強く影響される傾向を把握した。この差異の背後要因として、施設の内容や立地などの条件に加え、仁淀川町の調査対象者がバスツアーでの受動的な行動に対し、たくみの里の調査対象者が衛生型に配置された施設を能動的に行動したという行動形態の相違、AHPと共分散構造分析による評価方法の相違が考えられた。

リピーターの獲得をGTの発展や維持と捉えた場合、中島は、たくみの里を事例とする調査で、「収益性の観点からみると価値は高くないが集客性の観点からみると価値が高く、当地区の都市農村活動において中核的な個人や有志グループなどの各主体の自助努力に依存した多様な商品・サービスの提供はもとより、非日常的な農村空間の中での“癒し”や地元住民との“交流”(店舗での会話、農作業中や道端での挨拶など)に寄与する、集団活動や住民のパーソナリティが重要¹⁵⁾とする提案をしているが、本研究では、この有意性を定量的に裏付ける1つの示唆ができた。

今後は、GT継続的な運営維持していく上で、利用者の属性、行動、評価に着目し、特に交流体験の充実を如何に図っていくか、継続的な改善を進めることが重要と考える。

補注及び引用文献

- 1) 鈴江恵子(2009):ドイツグリーン・ツーリズム考,東京農業大学出版会, 18-36
- 2) 農林水産省(2012):平成24年度食糧・農業・農村白書, 300
- 3) 齋藤雪彦・中村政・木下勇(2009):グリーンツーリズムの趨勢に関する研究,ランドスケープ研究 61(6), 759-762
- 4) 本庄宏行・三浦伸夫・藤本信義(2000):都市農村活動の展開と住民意識-新潟県小国町を事例として-,農村計画論文集第2集, 277-282
- 5) 高田哲也・佐藤洋平・石川啓也(2000):北海道におけるファームインの現状と評価-鹿町,新得町を事例として-,農村計画論文集第2集, 289-294
- 6) 齋藤雪彦・中村政・木下勇・椎野亜紀夫(2001):中山間地における集落空間管理とグリーンツーリズムの関係に関する研究,ランドスケープ研究 64(5), 887-892
- 7) 富樫頼・米原慶子(1997):都市住民のグリーンツーリズム需要に関する研究-大阪府下都市近郊農山村に対するグリーンツーリズム需要-,建築学会計画系論文集第497集, 117-122
- 8) 加藤幸・谷口健・田村義夫(2004):都市住民のグリーンツーリズムに対する意識調査,農土誌第72号(11), 937-940
- 9) 室谷正裕(1998):観光地の魅力度評価-魅力ある国内観光地の整備に向けて-,運輸政策研究, Vol.1, No.1, 16-24
- 10) 北垣友里・市村恒士(2012):利用者の評価構造に基づいた低炭素型の都市公園整備に関する研究,ランドスケープ研究 75(5), pp.497-502
- 11) 小松亜紀子・市村恒士・金岡吾吾(2013):自然体験施設における利用者評価構造の経年変化と施設マネジメントに関する研究,ランドスケープ研究 76(5), 685-690
- 12) 岩谷祐子・金岡吾吾・市村恒士・島田正文・黒澤和隆(2008):自然体験サービス提供施設としての国営木曾三川公園に対する利用者評価に関する研究,ランドスケープ研究 71(5), 623-628
- 13) 中山樑夫(2009):AHPによるグリーン・ツーリズムの需要動向分析-高知県仁淀川町向けバスツアー客のアンケート調査から-,農林業問題研究(第186号) 25-30
- 14) 中島正裕・千賀裕太郎・齋藤雪彦(2001):都市農村交流活動に対する住民の評価に関する研究-群馬県利根郡新台村を事例として-,農村計画論文集,第3集, 25-30.
- 15) 中島正裕:都市農村交流活動における観光資源の維持管理に関する事例分析-都市農村交流活動による農村地活性化の計画づくりに関する研究 その2-,農村生活研究,第52巻,第1号, 30-42
- 16) たくみの里ホームページ, takuminosato.or.jp/index.html, 2014.5.10閲覧
- 17) 1999年には「歴史国道指定」を受けた宿場通り(三国街道)の国道整備により,国道の幅幅やストリートファニチュアの設置等が行われ,情緒あふれる空間が創造されている。